

音楽鑑賞活動における知覚・感受の言語化についての研究 —生徒の理解度・表現方法に着目して—

音楽教育コース 4 年 20141006 田中 茉悠

1. 論文構成

序論

I 音楽科の鑑賞活動に関する基本的事項

I-1 音楽科における鑑賞活動の意味について

- (1) 音楽科の活動について
- (2) 音楽的な見方・考え方について
- (3) 鑑賞領域の内容について

I-2 鑑賞領域から考える「音楽を愛好する心」について

- (1) 音楽の素材としての音
- (2) 音楽の構造
- (3) 音楽によって喚起されるイメージや感情
- (4) 音楽の鑑賞における批評
- (5) 音楽の背景となる文化や歴史など

II 音楽科鑑賞活動の指導の実際 ①中学生を対象に

II-1 研究授業の指導案とワークシート

- (1) 研究授業指導案
- (2) 研究授業ワークシート

II-2 研究授業の実践と評価

- (1) 発問について
- (2) 指導教官の評価

III 音楽科鑑賞活動の指導の実際 ②音大生をモニターとして

III-1 模擬授業概要

- (1) 教材について
- (2) 模擬授業指導案
- (3) 模擬授業ワークシート

III-2 教材の楽曲について

- (1) スメタナと国民楽派について
- (2) 標題音楽と交響詩、民族主義について
- (3) 《我が祖国》における 6 つの交響詩について

III-3 模擬授業実践についての考察

- (1) 意見・回答分析
- (2) 発問について

結論

謝辞

参考文献一覧

2. 研究の目的

本研究では学校音楽教育の情操教育としての一面に触れ、音楽科の活動で身に付けることをねらいとしている知覚、感受の観点から、生徒の理解度に応じて変化する言語表現について着目し、言語表現としての鑑賞活動を中心に考察する。この言語表現によって構築される理解力から、学習するにあたって重要であると考えられる「音楽を愛好する心を育む」ことにつなげるための授業作りを提唱する。そのために、鑑賞活動において知覚、感受の言語化や楽曲の理解を深めるためにどのような指導を目指すべきかを明らかにすることが目的である。

3. 論文の概要

第 I 章では、先述の目的を検証するために、鑑賞活動に関する基本的事項を『中学校学習指導要領

解説『音楽編』に基づいて確認した。次に、本研究のなかで重要となる「音楽を愛好する心を育む」ことを目的とした観点から見た鑑賞領域の指導内容を掘り下げていくことで、本論文内における鑑賞活動の指導内容、評価観点の基盤を明確なものとした。第Ⅱ章では筆者が教育実習の中で実施した、J.S.バッハ作曲の《フーガ ト短調》を教材とした鑑賞活動の研究授業例を取り上げ、作成した指導案とワークシートを例に、言語化のための発問によって得られた効果について考察した。経験から得た課題を本研究に活かすため、指導教官からの評価、指摘を振り返り、発問の内容や問いかけ方、指導方法の改善点を分析することで次章の研究活動へのステップとした。第Ⅲ章では、第Ⅰ章、第Ⅱ章で記した研究的結果を踏まえ、研究目的の達成に適したモニターとして音大生を対象に模擬授業を行った。教材として、スメタナの標題音楽作品《ブルタバ（モルダウ）》を取り扱い、楽曲から感じ取ったこと、それに対しての理由を言語化するための場面を多く取り入れた指導案を作成し、実践で得た生徒の反応からこれからの音楽科教育に必要となる要素について検討した。

4. 考察の結果

教育実習で実施した模擬授業と、その結果から得た反省点を反映させて作成した授業の結果から考察した結果、言語化活動に着目して作成した後者の模擬授業では予想を超えた言語化活動が見られた。その理由として、段階的に理解を深められるよう工夫した授業進行や、生徒自ら意欲的に思考できるように配慮した発問が挙げられる。この2つの授業から、本研究の目的である「音楽を愛好する心」を育むために必要とされるのは知覚と感受を合わせた多角的な面から音楽に触れ、自分自身で感じたことを糧として行う学習理解であると考察した。だが音楽科教育において取り扱われる教材は実に多種多様であり、生徒の認識は教材によって様々であることは想像に難くない。だが生徒に馴染みのない教材を取り扱う場面でこそ、発問や生徒の意見が全体の学習姿勢を意欲的に変化させる手助けの1つとなり、豊かな言語化活動への第一歩となると考えられる。この発問を効果的に行い、円滑な授業を実践するためにも、音楽科教師には順応性のある指導が求められると結論付けた。

5. 参考文献

- 小原光一ほか 2021 『中学生の音楽 2・3 上・下』 東京:教育芸術社
- 加藤穂高 2015 「《ブルタバ》の鑑賞を通して何を伝えるか、何を学ばせるか:専門的解釈からのアプローチ」 『音楽教育実践ジャーナル』 12 巻 2 号
- 内藤久子 2002 『チェコ音楽の歴史:民族の音の表徴』 東京:音楽之友社
- 内藤久子 2007 『チェコ音楽の魅力:スメタナ・ドヴォルジャーク・ヤナーチェク』 東京:東洋書店
- 松下行馬 2016 「子どもの心に残る音楽の授業の要件についての一考察:中学生へのアンケート調査の結果から」 『音楽教育実践ジャーナル』 14 巻
- 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説:音楽編』 東京:教育芸術社
- 山崎正彦 2019 『音楽鑑賞指導入門:新時代への音楽鑑賞指導のあり方と指導法 特別活動・総合的な学習への展開もふまえて』 東京:スタイルノート
- 吉富功修; 三村真弓; 伊藤真; 徳永崇 2016 「わが国の音楽科における共通教材に関する研究:中学校音楽科における《モルダウ》を視点として」 『音楽文化教育学研究紀要』 28 号

指導担当教員: 佐藤 昌弘

イメージの可視化からアプローチする歌唱指導についての一考察 —豊かな創造力を育成する音楽教育を目指して—

音楽教育コース4年 20141011 松宮 美咲

1. 論文構成

序論

- (1) 研究の背景
- (2) 研究の目的
- (3) 研究の対象と方法

第I章 想像力育成に資するイメージ奏法について

第1節 想像力育成の重要性

- (1) コロナ禍での学校教育
- (2) コロナ禍での音楽科教育

第2節 イメージ奏法を活用した音楽教育

- (1) 「イメージ奏法」の5つの学習過程
- (2) 1つの物語による置き換え

第3節 イメージ奏法による音楽の可視化

- (1) 「イメージ奏法」の4つの分類
- (2) 「イメージ色」の活用
- (3) 演奏設計図

第II章 イメージ奏法による歌唱の授業づくりについて

第1節 イメージ奏法を活用した歌唱授業の実践

- (1) 模擬授業概要
- (2) 教材について

第2節 模擬授業の指導案とアンケート調査

- (1) 指導案
- (2) アンケート調査

第III章 イメージ奏法による歌唱活動の可能性について

第1節 模擬授業実践についての考察

- (1) 模擬授業の成果
- (2) 模擬授業の反省点

第2節 《花の街》の「イメージ奏法」について

第3節 《花の街》のイメージ奏法の実践と考察

結論

謝辞

参考文献一覧

2. 研究の目的

本研究では、さまざまな制約をもたらしたコロナ禍における学校教育での歌唱活動の事例をもとに、歌唱活動における表現力の育成の重要性をあらためて洗い出し、ピアニスト・武本京子の編み出した「イメージ奏法」による想像力強化とのつながりを見出すことが基盤となった。それらのことをもとに、音楽大学生をモニターとして歌唱活動に「イメージ奏法」を取り入れた音楽科の模擬授業を行うことにより、学生の音楽表現にどのような変化があるのかについての観察、考察を通し、「イメージ奏法」の活用によって想像力を育成することの可能性を探求することが、これからの音楽教育にいかん資するかということをはっきりとすることが本研究の目的であった。

3. 論文の概要

第Ⅰ章では、想像力育成に資するイメージ奏法について論述した。まず第1節では、想像力を育成することの重要性について論述した。第2節では、「イメージ奏法」の5つの学習過程について論述した。第3節では、「イメージ奏法」によって音楽をどのように可視化するのかについて論述した。第Ⅱ章では、イメージ奏法による歌唱の授業づくりについて論述した。まず第1節では、2023年9月25日に行った模擬授業の概要について教材の説明も交えながら論述した。次に第2節では、模擬授業の際に使用した指導案と授業後に行ったアンケート調査の結果から考察を行った。第Ⅲ章では、イメージ奏法による歌唱活動の可能性について論述した。まず第1節では模擬授業後にモニターである学生に行ったアンケート結果を基に成果と反省点について論述した。次に第2節では模擬授業での反省点を踏まえて、音楽科の歌唱共通教材である《花の街》(作詩：江間章子 作曲：團伊玖磨)を教材とした「イメージ奏法」についての概要について論述した。そして第3節では、《花の街》のイメージ奏法の実践と考察について論述した。

4. 考察の結果

本研究の模擬授業とアンケート調査の結果から、モニターとなった音楽教育コースの1年生たちは、中学の卒業時から始まって3年間の高校生活が終わるにいたるまでコロナ渦であった。そのため、何の制限もなく存分に歌唱活動をした、あるいは歌唱表現をしたという経験がこの3年間皆無だということが判明した。また、「イメージ奏法」を行うことで、自身の思いを表現できるようになった学生が多く、想像力の育成に繋がることが明らかになった。そして、「イメージ奏法」は言葉では表現することが出来ない音楽の抽象的なイメージを「演奏設計図」や「表現曲線」といった方法で可視化することができるため、音楽学習者の想像力を育成することに適した指導法であり、歌唱活動をする上でも有効的な指導法であることが分かった。今後の学校教育は大幅にICTを活用した授業に移行し、生徒には1人につき1つのタブレット端末の導入が当たり前になってくる状況が予想される。そのため、生徒が答えを頭の中で想像する場面が減ることが考えられるため、本研究で行った「イメージ奏法」を活用して、生徒自身の想像力を活かす授業づくりを行っていく必要があると言えるであろう。

5. 参考文献

武本京子 2013 『武本京子の「イメージ奏法」解説書』音楽之友社

武本京子、福澤維斗子 2018 『「イメージ奏法」を活用した協働的音楽教育による感情の多様性の認識と独創的な創造力の育成—小学校教育におけるICT活用授業による人間力育成の実践例と効果—』『日本音楽教育学会』47巻 100-101

武本京子ほか 2019 「創意工夫を生かした『イメージ奏法』による想像力の育成—小・中・専門学校で音楽表現向上を目指す授業の取り組み—」『日本音楽教育学会誌』48巻 73-74

武本京子、山口茉莉子 2020 「『イメージ奏法』による協働学習により、ダイバーシティを受容しインクルーシブ・リーダーシップを育成する音楽教育：中学校の音楽の授業実践における合唱指導報告」金城学院大学論集 人文科学編 16巻 110-122 金城学院大学論集 人文科学編 16巻 110-122

指導担当教員：佐藤 昌弘